第7期 pES club step4 大会看護学生シナリオ

平成20年7月6日

聖路加国際病院 看護部

市川 梓

東京北社会保険病院 総合診療科

南郷 栄秀

<http://spell.umin.jp>

あなたは名羅手部総合病院内科病棟に勤務する2年目看護師です。

結唐高志さんは13年前から糖尿病を指摘されており、当院外来に通院している64歳男性です。先日の外来受診時、空腹時血糖231mg/dl、HbA1c7.8と血糖コントロールが不良だったため、今回糖尿病の教育目的で入院しました。結唐さんは身長165cm、体重75kgで、職業は飲食店店長、自宅では妻と二人暮らしです。軽い網膜症と腎症がありますが、神経障害と脳梗塞や心筋梗塞などの大血管障害は合併していません。甘い食べ物が好きな結唐さんは食事制限が守れず、精査の結果、内服薬での治療は限界との主治医の判断で、インスリンを導入することとなりました。昨日、糖尿病専科の看護師から自己血糖測定と自己注射の指導を受けました。手技はひと通り習得できたと申し送りを受けています。

あなた「結唐さん、失礼いたします。そろそろ昼食のお時間になるので、血糖測定とインスリンの注射の準備をしましょう」

結唐さん「もうそんな時間かい。血糖は上手に測れるようになってきたぞ。でも、インスリンの注射がいまいち慣れないんだよ。家に帰ってからも毎日こんなことをしなきゃいけないと思うと面倒くせえなあ。昼は5単位だったっけ？」

あなた「はい。ノボラピット300フレックスを5単位です。結唐さんはインスリンの注射のどんなところが不安ですか？もう一度私と一緒に確認しましょうか？」

結唐さん「ありがたいねえ。もう一回注射の仕方を教えてもらってもいいかな？年のせいか1回じゃ覚えられなくて」

あなた「分かりました。ではもう一度私と確認をしましょう。お食事をお持ちしてからしますので、お待ちくださいね」

あなたは、インスリンの自己注射の方法と退院後の生活の注意について、結唐さんに再度指導することにしました（10分間）。